

〔研究ノート〕

アカデミックリテラシー授業報告2018

The Report on “Academic Literacy” 2018

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健・音 成 陽 子・姉 川 正 紀・近 江 貴 治
S.H. マキネス・新 茂 則・徐 涛・中 川 隆

1. はじめに

中村学園大学流通科学部では、1年前期に必修科目として「アカデミックリテラシー」という科目を実施している。「アカデミックリテラシー」は流通科学部に入学した新1年生を対象とする初年次教育科目として、大きな役割を果たしている。その教育目標は次の通りである。

- ①高校生活から大学生活へ順調に移行するための心構えを知り、新しい仲間との親睦を図る。
- ②高校時代の受動的な学習ではなく、大学では興味を持った分野を自ら追求する能動的な学習が必要なことを実体験し、それに必要なスキルを身につける。
- ③流通科学部のカリキュラムに対する理解を深め、そのために今何をやるべきかを考える。

2. 授業概要及び授業計画

まず、「アカデミックリテラシー」の授業概要及び、授業計画（15回）を示す。

授業は、①小教室での各指導主任による教室単位の講義及び演習と、②大教室での講師による全体講義及び③授業時間外の図書館ツアーからなる。①は、各クラス単位での指導主任による自由な講義・演習を行うが、数名のグループ単位でテーマを決め、自ら調査し、互いに報告しあい、意見を交換し、レポートにまとめるというグループ学習と、講義をノートにまとめ、新聞や書籍等から補足情報を収集する各人の個

人学習を通じて、大学でのスタディ・スキルを習得する。②は、履修やTOEIC試験、海外研修についての講義を行う。③は、1回だけ別途時間を指定し、30名単位での図書館ツアーを行い、図書館の利用方法を学ぶというものである。

各回の授業内容は、以下の通りである。

- 第1回（小教室）プレースメントテストの実施
- 第2回 ガイダンス
 - ・個人票の作成
 - ・クラス委員長の選定、自己紹介など
 - ・個人面談
- 第3回 図書館ツアー（担当：図書館）8回に分けて行うため、実施時期はクラスにより異なる。
- 第4回～第5回（小教室）三角ロジック・ブレインストーミングの演習を行い、論理的思考を身につける。
- 第6回～第7回（小教室）各指導主任がテーマを決め、クラスごとに講義を行う。
- 第8回～第13回テーマ授業 各指導主任がテーマを決め、クラスごとに交代しながら、講義を行う。
- 第14回（大教室）① TOEIC 試験の説明と海外研修の紹介。②海外スカラシップ制度の紹介。
- 第15回（大教室）今後の履修に向けて教務上の注意を行う。

まず、全体のプログラムとしては、第1回の履修指導、第2回のプレースメントテスト、第3回の図書館ツアー、第14回の① TOEIC 試験の説明と海外研修の紹介。②海外スカラシップ制度の紹介、第15回の今後の履修に向けての教務上の注意がある。

まず、プレースメントテストについて述べる。プレースメントテストは、高校までの基礎的学力を問う試験で、英・数・国で実施した。この点数の低かった学生については、昨年度と同様、基礎教育センターにおいて、補講を受けることを義務づけた。プレースメントテストの成績と一学年における成績、補講の実施の効果、などについては、別途に報告する。

その他「アカデミックリテラシー」の特色として挙げられるのは、第8回～第13回に実施したテーマ授業である。各指導主任は、1時間ずつ順番にローテーションを組んで、それぞれテーマの授業を各クラスで順番に行っていく。そして、そこでテーマに基づいた課題を行い、そのレポートの作成を学生に課す。したがって、各教員は、テーマ授業を各クラスに対して回6回繰り返すことになる。また、第3回のところで予定している図書館ツアーに関しては、全学年が一度に行うことができないので、テーマ授業と共に各クラスで順番に行っていく。さらに、各教員が指導主任を担当するクラスに対しては、ローテーションで行ったテーマ授業の他に、第4回～第7回にそれぞれ独自のグループ学習を行った。

評価方法は、①テーマ授業に関するレポートの内容、②グループ学習報告と最終レポートの内容、③出席状況及び積極性等を総合的に勘案することとした。テーマ授業の内容を各10点として、各教員に採点してもらい（計70点）、クラス単位のグループ学習の点数を30点として、それに加えた。そこに、出席状況及び積極性等によって加点・減点を加えた。特に、プレースメント試験において、低得点だった学生に対し

ては、基礎教育センターにおける補講を必修として、その出欠を点数に反映させた。

【三角ロジック】

①と②は、同じ〈事実〉から異なる〈主張〉が導き出されている。

同じ〈事実〉から異なる〈主張〉が導き出されるのは、〈論拠〉が異なるからである。

では、①②のそれぞれの〈論拠〉とはどのようなものか。

靴のセールスマンが、熱帯雨林の土地を探検していて誰も靴を履いていない村を発見した。

①この村の人々は、誰も靴を履いていない〈事実〉→この村では靴は全く売れない〈主張〉。

②この村の人々は、誰も靴を履いていない〈事実〉→この村では靴はたくさん売れる〈主張〉。

三角ロジックの説明

【ブレインストーミング】

グループ活動として、大学生活におけるイベントと①やるべきこと、②やりたいこと、③知りたいこと・わからないことを学年・学期ごとに書き出し、表にする。その後、作成した表についての発表と質疑応答やディスカッションを行う。

【図書館演習】

図書館の方による館内ツアー後、流通科学部での学びに関連するキーワードから、蔵書検索を行い、本の抜き書きを行う。

【テーマ授業の例】

●福沢健 吉見俊哉「ディズニーランド」を読む

大学の勉強の意味と、必要な技能（読解力・要約力・思考力）とを考えてもらうために、「ディズニーランド」を例にとりてワークショップを行った。

東京ディズニーランドの地図、北九州スパー

スワールドの地図を配布して、両者の違いをグループごとに討論して、発表させた。

次に、吉見俊哉「ディズニーランド」を読ませて内容を要約させ、そこで、自分たちが漠然と考えていたディズニーランドの特徴は、「インターラクティブ性」「三次元のアニメーション」という明確なコンセプトに基づいて作られたものであることを認識させた。ここで、大学の勉強とは、理解できないような難しい理論を覚えるものではなく、自分たちが漠然と感じていたもの、感覚的に捉えているものについて、論理的に説明するものであることを強調した。また、ディズニーランドの特徴については、他の立場からもさまざまに説明されていることを述べたうえで、大学の勉強とは一つの結論を覚えるものではないということも述べた。

レポートは、吉見の論文を踏まえて、ディズニーランドと他のテーマパークとの違いをまとめさせた。

●音成陽子 授業テーマ：「毎日できる健康チェック」

1. 脈拍測定

脈拍を測定することにより、体調のチェックや疾病の兆候などを知ることができる。脈拍測定は、時や場所を選ぶことなくできる健康チェックの一つといえる。授業では、自分およびクラスメイトの脈拍も測定してみる。

2. 立ち上がりテスト

日本整形外科学会が指定するロコモティブシンドロームのチェック項目の一つである。膝伸展筋力をイスから立ち上がることでチェックする。歩行には両足で20cmの高さ、あるいは、片脚で40cmの高さから立ち上がることができることが必要といわれている。授業では教室内のイス（特号46cm）と踏み台（20cm）から、反動をつけずに立ち上がり、3秒保持することとした。立ち上がりは、両脚、右脚、左脚で実施した。

3. レポート課題

「毎日、観点にできる健康チェック」をテーマに、日常生活を振り返って3つのチェック項目とその説明について、200字程度のレポートを作成した。作成には、3つのチェック項目と課題は、N-Leapsを利用して提出してもらった。全員の提出を確認後、フィードバックを行った。

●姉川正紀 SNSにおける炎上とその影響

本授業では、ほとんどの学生が使用しているTwitter等のSNSにおける炎上の実際とその悪影響について講義をおこなった。具体的には、まずインターネットにおけるIPアドレスの仕組みや、匿名性・個人情報の保護の必要性を述べた。次に、過去に発生したSNSの炎上の詳細な実例を幾つか紹介すると共に、その炎上がその後どのような悪影響を与えるかを紹介した。その後、たとえSNSが炎上しなくても過去のSNSの書き込みにより、就職内定が取り消された事案を紹介し、SNSの適切な利用を学生自身に考えさせた。最後に、本授業を通して得られた事や考えた事をレポートにまとめ、E-Learningシステム上に提出させ採点をおこなった。

●近江貴治

本授業では、まず、自動車とパソコンを取上げてサプライチェーンを鉱山までさかのぼり、そこから原料がどのように形を変え、輸送されて消費者の手元にたどり着いているのかを説明した。次に、TED Talkの動画より写真家・Lisa Kristineの「現代の奴隷の目撃写真」を視聴させた。そして奴隷的な生産現場は、実は我々が使用している種々の製品と結びついていることを説明し、それを知らずして製品開発できるのか、マーケティングで他人に売込むことは許されるものなのか、という問いを受講生に投げかけ、感想を小レポートとして提出させた。

サプライチェーンを知る必要性が理解できたとの記述が多くみられた一方、シリアスな動画であるにもかかわらず半数近くが居眠りしてコメントも等閑なクラスもあった。学習・研究への好奇心を惹起するためにあえてシリアスな動画を題材に選び、感性を刺激することを試みたものの、まったく響かない学生が相当数いたのも事実であり、改めて初年次教育の難しさを実感した次第である。

● S.H. マキネス

1. Introduced strategies of studying English at the university level as opposed to high school;
2. Provided tips to make studying English both productive and enjoyable;
3. Gave a basic pronunciation exercise to emphasize difficulties Japanese speakers of English have with specific sounds;
4. Had the students write and present a simple self-introduction in English;
5. Played simple and short English games and activities to help motivate them for their other English classes.

● 新茂則 人生のライフサイクルから考えるキャリア教育

人生のライフサイクルから職業の意味と理解を図り「望ましい職業観と勤労観の育成」を視座し、キャリア教育の授業を行った。学生が「社会において果たさなければならない使命の自覚に基き、将来の進路を考えること」を授業目標とした。人生の理想的な「自己実現 (self-actualization)」達成に向け、大学生活で「生き方」、「生きる力」「自立して生活する力」について理解を図る。その骨子は下記のとおりである。

- ①職業の意義について理解し自己概念と自己意識について考える。

- ②職業生活を通して社会生活を営むことを自覚する。
- ③将来の夢や願いの実現に向けた努力の必要性を自覚する。
- ④進路選択を「生きる力」の観点から吟味する。
- ⑤自己の生き方を求め、進路を自分自身で探索する。

配布資料は拙著「人生のライフサイクルから考えるキャリア教育と資格取得」及び「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」「社会人基礎力」(経済産業省)を使用した。

● 徐涛 流通チャネルの革新と私たちの暮らし

内容紹介:「そもそも流通とは?」から始め、

1. はじめにー そもそも流通とは?
2. 私たちの暮らしと流通の発展ー 小売流通を例に、
3. 小売流通の変化について
4. 業態革新とその影響、
5. まとめー 問題点と課題

という目次構成で、流通チャネルの革新、特に身近な小売流通に関する業態革新により私たちの生活はどう変わっていくのか」について1年生に学んでもらった。とりわけ、アメリカと中国のeコマースの発展に在る小売業態発展への影響として、アマゾンやアリババグループの新しい事例を紹介した。差後に補足紹介として、「大学のゼミとは何?」について、徐ゼミを事例に説明した。

● 中川隆

オムニバス授業では、まず、流通の基本論について概説した。すなわち、生産と消費の間の隔たりを埋める流通の役割や機能について説明した。担当者の専門である食品流通を対象に、農業生産と食料消費の間にある①時間の隔たり、②空間の隔たり、③形態の隔たり、④所有

の隔たりなどを埋める流通の役割について、具体的事例をもとに講義を行った。学生には、講義内容を踏まえたうえで「安全な食の流通のために私たちができること」をテーマとしたレポートを課した。

3. 考察

アカデミックリテラシーは、各指導主任によるテーマ授業を行う点に特色がある。テーマ授業の共通の趣旨は、高等学校と大学との接続、特に学ぶための姿勢の違いについて、学生自身に考えてもらおうというものであった。学生には、さまざまな授業を通して、大学生活において必要なアカデミックリテラシーとは何かを考えていてもらいたいということが、我々アカデミックリテラシー担当の教員の願いである。

最後に、平成29年度の問題点について、平成30年度はどのように改善したか。またその効果はどうであったかという点について述べる。

①平成29年度の問題点としては、テーマ授業を8回行ったため、指導主任と学生とのつながりが希薄であった点があった。そこで、30年度は、改善を図るために、指導主任が自分の担当するクラスの時間数を増やした。その代わりに、テーマ授業を、昨年度までは各教員が8クラスを回るかたちだったが、今年度は分担して6クラス回るかたちとした、

②平成29年度の問題点としては効果測定を行っていなかったという点があった。平成30年度は、基礎教育センターの方での効果測定は行ったが、アカデミックリテラシーという授業を通して、学生にどのような意識の変化があったか、またはなかったかをきちんと検証できていない。効果測定のシステムを、特に社会人基礎力との関係から、考えていかなければならない。次年度以降の課題としたい。

③平成29年度、30年度に共通する問題として、学生の基礎学力の格差が大きいということが挙げられる。プレイスメントテストの導入によって、学生の基礎学力がどの程度かは明らかになった。その結果、プレイスメントテストの点数と、学生の理解力・学習態度・意欲・成績との間には、ある程度の相関があることが分かった。ただし、プレイスメントテストの点数が低かった学生は、単に基礎学力が不足している場合もあるが、学生相談室のカウンセリングの必要なケースも存在した。基礎教育センター・学生相談室との連携をさらに深めていく必要があるだろう。

以上、平成30年度のアカデミックリテラシーの概要とその問題点である。アカデミックリテラシーは新カリキュラムでは、スタディスキルⅠと名を変え、内容も更新する。この記録を、次年度以降に役立てていきたいと考える。